

令和5年 セブ観音戦没者慰霊祭  
追悼の辞

本日ここに、関係の皆様のご参列のもと、セブ観音戦没者慰霊祭がセブ日本人会主催でとり行われるにあたり、戦没者の御霊に対し謹んで哀悼の誠を捧げます。

昨年の慰霊祭において、私は、先の大戦において日本全体で三百万人余、フィリピンの戦場だけでも五十万人余、セブでの戦いで六千人を超える同胞の命が失われたと申し上げました。その後、地方出張の機会に各地で戦没者の慰霊をして参りましたが、その度に先の大戦の被害の爪痕に圧倒されました。

東ネグロス州ドウマゲティ市の戦争博物館を訪れた際には、戦時中同地で少年兵による特攻訓練が行われており、操縦ミスから山腹に激突した零戦の残骸が長らく残されていたとの話を聞きました。西ネグロス州バコロド市では、昭和二十年三月のセブの戦いに前後して、一万五千名に上る将兵が米軍と戦闘し、終戦までゲリラ戦を展開したことを知りました。日米両軍の激戦地となり八万人以上の将兵が犠牲となったレイテ島では、静岡県から派遣された第二十六師団独立歩兵第十三連隊がブラウエン飛行場の攻防をめぐって敢闘されたことを知りました。パナイ島のイロイロ市では、昭和二十年三月二十一日、日本人五百八十名が現地ゲリラと米兵に追い詰められ、最後まで生き残った四十名の日本人が集団自決を遂げる悲劇があったことを伺いました。

一方で、思いがけず心温まる事実にも接しました。南レイテ州マアシン市を訪れた際の歓迎式典において、「当地にも戦時中日本軍が駐留していたため、現地の方々にご迷惑をおかけしたかもしれない。」との発言を私がしたのに対し、副市長から、祖父から聞いた話だとして、「コマンダー・ハセガワに率いられた日本軍は規律正しく、現地住民には優しくかった。そして、日本軍は米軍に対してだけは勇敢に激しく戦った。」とお話をいただきました。レイテ州ドラグ市では、ドラグ守備隊長であった山添勇夫大尉が地元住民と親交を深め、「キヤプテン・ヤマソイ」と地元住民から親しまれ、昭和十八年四月にゲリラの待ち伏せ攻撃で戦死された後、地元住民が大尉のために記念碑を建立し、それは現在も「イサオ・ヤマゾエ・シュライン」として大切に管理されていることを知りました。今年六月には、東サマル州ポロンガン市のヒランガン海岸でサマル沖海戦記念碑の起工式が行われました。その式典において、来賓の一人から、日本軍艦艇により撃沈された米軍艦艇から脱出し海に漂っていた多数の米軍水兵に対し、日本軍艦艇の乗組員からは、水や食料が投げ渡されるとともに、米軍の敢闘に敬意を表して敬礼がなされたことが紹介されました。

各地での慰霊を通じて、私は、ご英霊が、「戦争のことを、そして、自分たちのことを忘れないでほしい。」と訴えかけているように感じました。私たちは、戦没者の皆様の尊い犠牲を決して忘れることは「ございません。また、同時に、フィリピンでの日米両国の熾烈な戦

闘によって、百万人を超えるフィリピン人の方々が尊い命を落とされたことも決して忘れてはならないことです。フィリピン人戦没者の御霊の平安を心よりお祈り申し上げます。

戦後七十八年、我が国は、先の大戦の深い反省の上に立って、平和を重んじる国家として、世界をより良き場とするため、フィリピンへの経済支援を含め、力を尽くしてまいりました。しかし、いま、世界では、ロシアによるウクライナ侵攻をはじめとして、ルールに基づく国際秩序を蝕む動きが目立ち始めております。我が国周辺地域においても、力による一方的な現状変更の動きが目立っています。自由で開かれた国際秩序を維持するため、我が国は、平和愛好国家として、フィリピンとの協力強化を含め、国際社会においてより大きな役割を果たす必要があります、そのことが戦没者の尊い犠牲に報いる途であると考えております。

日比両国の戦没者のご冥福を祈りつつ、日比両国の更なる友好親善を祈念し、追悼の辞とさせていただきます。

令和五年八月十五日

在セブ日本国総領事 山地 秀樹